

直示的アスペクト標識「ていく」「てくる」の 時間認識と時空間メタファー

Temporal Perception and Spatio-Temporal Metaphors of the Deictic Aspect Markers *te-iku* and *te-kuru* in Japanese

澤田 淳
SAWADA, Jun

1. はじめに

日本語の直示移動動詞「行く」「来る」は、テ形複雑述語の後項(補助動詞)「ていく」「てくる」へと文法化する中で、アスペクト的用法を獲得している。「ていく」「てくる」の主たるアスペクト的用法として、(i) 事象の長期的継続を表す「継続」の用法と、(ii) 事象の漸次的変化を表す「変化」の用法がある(近藤泰弘(2000)、澤田淳(2008、2009、2016a)など)。たとえば、次の例において、「リアリティを感じてきた」の「てくる」は「(現在時までの)継続」、「自信がなくなってくる」の「てくる」は「変化」を表す。

- (1) 和歌は日本人の心を表す。和歌について、しばしばそのように説明される。しかし、本当にそうなのだろうか。私自身、和歌に表現されている「心」に、その通りだと共感した経験がどれほどあったろう。落花を哀惜するのはまだしもなのである。ホトトギスの声が聞けて嬉しいとか、恋しい人に逢えたら死んでもいいとか、そうした歌にどれだけリアリティを感じてきただろうか。あらためてそう自分に問いかけてみると、かなり自信がなくなてくる。

(渡部泰明『和歌とは何か』6頁)

本稿では、「継続」と「変化」を表す直示的アスペクト標識「ていく」「てくる」の時間認識について、時空間メタファーの観点から考察をおこなう。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、COME/GO¹由来のテンス・アスペクト標識

¹ ここでは、英語の大文字表記 COME、GO を、それぞれ、「求心的移動」、「非求心的移動(遠心的移動を含む)」を表す直示移動動詞の汎言語的な総称として用いている。

の通言語的類型を概観する。3節では、「ていく」「てくる」の用法を概観した上で、「継続」と「変化」の「てくる」における事象の特徴について考察する。4節では、「継続」と「変化」の「てくる」（「ていく」）の時制制約について、「空間移動」を表す本動詞「来る」（「行く」）の視点制約との関係から考察する。5節はまとめである。

2. COME/GO 由来のテンス・アスペクト標識と時空間メタファー

多くの言語において、直示移動動詞 COME/GO は、テンス・アスペクト標識へと文法化している点が報告されている（Fleischman (1982)、Emanatian (1991, 1992)、Bybee, Perkins and Pagliuca (1994)、Heine and Kuteva (2002)、Botne (2006)、Essegbey (2004)、渡邊淳也 (2017)、Takahashi (2018) など）。Fleischman (1982: 322-326) は、COME/GO 由来のテンス・アスペクト標識と「過去」「未来」の時間との結びつき方について、通言語的な考察をおこなっている。そこでは、(i) COME 型過去標識 (COME-pasts)、(ii) GO 型未来標識 (GO-futures)、(iii) GO 型過去標識 (GO-pasts)、(iv) COME 型未来標識 (COME-futures) という4つの類型が認められる点が指摘されている。また、この4つの類型のうち、COME 型過去標識と GO 型未来標識は、「自己移動」(moving ego) の時空間メタファーを、GO 型過去標識と COME 型未来標識は、「時間移動」(moving time) の時空間メタファーを反映するとされている。

Emanatian (1991) は、上記の Fleischman (1982) の分析に基づき、これら4つの類型を、次のような図式によって整理している。

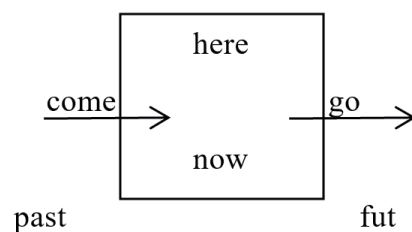


図1：COME 型過去標識／GO 型未来標識と「自己移動」の時空間メタファー
(Emanatian (1991: 490)、cf. Fleischman (1982: 322-326))

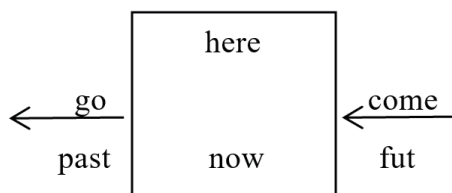


図2：GO 型過去標識／COME 型未来標識と「時間移動」の時空間メタファー
(Emanatian (1991: 490)、cf. Fleischman (1982: 322-326))

「自己移動」の時空間メタファーでは、自己（観察者）が時間軸上を過去から未来に向かって移動するものと捉えられており、時の流れは、「過去 → 現在 → 未来」となる。一方、「時間移動」の時空間メタファーでは、時間（出来事）が、未来から自己（観察者）が位置する現在を通して過去へと移動するものと捉えられており、時の流れは、「過去 ← 現在 ← 未来」となる（Clark (1973)、Lakoff and Johnson (1980)、Fillmore (1997)、澤田淳 (2025) など）。たとえば、日本語の「来し方」は「過去 → 現在」、「行く末」は「現在 → 未来」の時の流れを表しており、「自己移動」の時空間メタファーを反映している。一方、「行く年」は「過去 ← 現在」、「来る年」は「現在 ← 未来」の時の流れを表しており、「時間移動」の時空間メタファーを反映している（渡邊淳也 (2017)、澤田淳 (2025)）。

3. 「ていく」「てくる」の用法

3.1. 「ていく」「てくる」の多義性

はじめに、「継続」と「変化」の用法を含む「ていく」「てくる」の用法を整理しておこう。「ていく」「てくる」は、以下のような用法を持つ（澤田淳 (2009, 2016a) 参照）。

- (2) a. 駅からバスに乗っ {ていった／てきた}。 (同時移動)
- b. 駅前の店でパンを買っ {ていった／てきた}。 (継起移動)
- c. 男が子ども達のほうに近づい {ていった／てきた}。 (移動の方向づけ)
- d. ヤクザが睨ん {＊ていった／できた}。 (行為の方向づけ)
- e. バクテリアの研究を続け {ていった／てきた}。 (継続)
- f. 川の水嵩が徐々に増え {ていった／てきた}。 (変化)
- g. 星が出 {＊ていった／てきた}。 (出現)
- h. ポチは苦しむことなく死ん {ていった／＊できた}。 (消滅)

「同時移動」では、前項動詞が「いく」「くる」と同時進行の行為を表し、「いく」「くる」の移動の様態や手段、経路位置関係などを表す。「継起移動」では、前項動詞が「いく」「くる」以前に起こる行為を表し、「いく」「くる」との間の継起的な関係を表す。「移動の方向づけ」では、前項動詞が位置移動を表し、「いく」「くる」が主語指示物の移動の話者領域への方向づけを表す。「行為の方向づけ」では、前項動詞が行為を表し、「くる」が主語指示物の行為の話者領域への方向づけを表す。「継続」では、前項動詞が行為または変化を表し、「いく」「くる」が事象の長期的継続を表す。「変化」では、前項動詞が変化を表し、「いく」「くる」が事象の漸次的変化を表す。「出現」では、前項動詞が非意図的事象を表し、「くる」が事象の話者領域への出現・発生を表す。「消滅」では、前項動詞が非意図的事象を表し、「い

く」が事象の話者領域からの消滅・消失を表す。

3.2. 「継続」と「変化」の「てくる」の事象の特徴

「継続」の「てくる」は、事象の「長期的継続」を表す場合に使われる。事象が「長期的継続」とはみなしにくい場合には、「継続」の「てくる」は使いにくい（日本語記述文法研究会（編）（2007: 45）参照）²。

- (3) a. 若いときからずっと人生について考えてきた。
- b. ? さっきから旅行の行き先について考えてきた。

（日本語記述文法研究会（編）（2007: 45））

「継続」の「てくる」における継続的事象の時間的長さは、事象の性質・種類に応じた相対的なものである。すなわち、どの程度の長さの時間的継続が「長期的継続」であるかは個々の事象に応じて異なる。

- (4) a. {小さい頃から／? 一か月前から} 人生について考えてきた。
- b. {小さい頃から／一か月前から} ベルマークを集めてきた。

次に、「変化」の「てくる」の事象について見てみよう。「変化」の「てくる」は、事象の「漸次的変化」を表す場合に使われる。それゆえ、事象が「瞬間的变化」を表す場合には、「変化」の「てくる」は使いにくい。

- (5) a. あかりが少しずつ灯ってきた。
- b. ?? あかりがパッと灯ってきた。
- (6) a. 信号の色が青に変わった。
- b. ?? 信号の色が青に変わってきた。

前項動詞が瞬間動詞の場合でも「変化」の「てくる」は使われ得るが、その場合、変化を伴う複数個の個体があり、それらが全体として漸次的・連続的な変化を示すようにする必要がある。

² 同じく「継続」を表すアスペクト形式でも、「ている」には、継続的事象の時間的長さに関する制約はない。

- (i) a. {小さい頃から／*さきほどから} 英語の勉強をしてきた。
- b. {小さい頃から／さきほどから} 英語の勉強をしている。

- (7) a. ?? 髪の毛が1本抜けてきた。
 b. 髪の毛がとんとん抜けてきた。

「継続」の「てくる」の前項動詞には動作動詞が生起する例が多いといえるが、以下のように、変化動詞が生起する例も見られる。

- (8) 格安居酒屋の経営者だった人が言っていた。「今まではアルバイトがたくさんいたから、日本の人たちはいいものを安く食べられた」。裏を返せば働く人を踏み台にした安売り経営が、はびこってきたということだ。

[継続] (「天声人語」『朝日新聞』2017年9月5日、朝刊)

- (9) ベトナムでは、送り出し機関が実習生に負担させる高額の手数料が問題になってきた。ベトナム政府が改善に乗り出したのは去年のことだ。

[継続] (『朝日新聞』2023年3月26日、朝刊)

前項動詞が変化動詞である場合、「てくる」は、「継続」と「変化」の用法に潜在的に多義的となり得るが、実際には、コンテキストや共起する副詞の違いなどによって多義性は解消される。たとえば、「これまで／今まで」「長い間／ずっと」などの事象の継続を示す副詞や、「～のたびに」などの事象の繰り返しを示す副詞が生起した場合、「てくる」は「継続」の解釈となり、「次第に／徐々に」などの漸次的推移を示す副詞が生起した場合、「てくる」は「変化」の解釈となる。

- (10) a. 働く人を踏み台にした安売り経営が、長い間はびこってきた。 (継続)
 b. 働く人を踏み台にした安売り経営が、徐々にはびこってきた。 (変化)
 (11) a. ベトナムでは、送り出し機関が実習生に負担させる高額の手数料がこれまで問題になってきた。 (継続)
 b. ベトナムでは、送り出し機関が実習生に負担させる高額の手数料が次第に問題になってきた。 (変化)

4. 「継続」と「変化」の「てくる」の時制制約と時空間メタファー

4.1. 「継続」と「変化」の「てくる」の時制性

「継続」と「変化」の「てくる」の重要な相違の1つとして、時制性に関するものがある。すなわち、以下の例に示されるように、「変化」の「てくる」と異なり、「継続」の「てくる」では、参照時 (reference time) (Reichenbach (1947)) は、基本的に発話時に制限され、

発話時以外の時点（とりわけ、未来時）には置きにくいという事実が観察される。

(12) 「変化」の「てくる」の時制性

- a. おい、川の水嵩が増えてきたぞ。早く非難しよう。（参照時：現在時）
- b. 昨日、夕方頃から川の水嵩が急激に増えてきた。（参照時：過去のある時点）
- c. 夕方頃から川の水嵩が増えてくるはずだ。（参照時：未来のある時点）

(13) 「継続」の「てくる」の時制性

- a. 今日までバクテリアの研究を続けてきた。（参照時：現在時）
- b. ?5年前までバクテリアの研究を続けてきた。（参照時：過去のある時点）
- c. *5年後までバクテリアの研究を続けてくるつもりだ。
（参照時：未来のある時点）

日本語の「てくる」の「継続」用法と相似的な機能を持つものに、英語の have 完了形の「継続」用法があるが、次の例が示すように、英語の have 完了形の継続用法では、参照時は現在時・過去時・未来時のいずれでもあり得る。この点で、日本語の「てくる」の「継続」用法に見られる時制制約に対しては、特別な説明が必要となる。

- (14) a. The new has been broadcast at 10 o'clock for as long as I can remember.
（参照時：現在時）(Leech (2004: 39))
- b. At that time we had been living in the caravan for about six months.
（参照時：過去のある時点）(Swan (2016: 55))
- c. I'll have been teaching for twenty years this summer.
（参照時：未来のある時点）(Swan (2016: 40))

「継続」と「変化」の「てくる」の時間認識の違いについて論じた重要な研究に、野村剛史（2009）と坂原茂（2012）がある。次は、野村剛史（2009）からの引用である（「経歴」、「アスペクト的出現」は、概ね、それぞれ、本稿でいう「継続」、「変化」に対応する）。

- (15) さて、アスペクト的出現「柿の実が赤くなってきた」だと空間的距離の接近が無いわけだから、主体の移動は現象の現出として（中略）、ただ時間的にのみ「今」に近づいた感じがする。（中略）経歴の「来た」との決定的な違いは、経歴の「来た」では話者が主体に寄り添って「 t_0 = 今」に進んできたのに対して、話者が主体に寄り添わない「来た」では、話者は常に「今」にいて、話者とは疎遠な主体が勝手に運動しているのである。（野村剛史（2009: 48））

野村剛史（2009）で説明されている「経歴」と「アスペクト的出現」の時間認識の違いは、「自己移動」と「時間移動」の時空間メタファーの違いとして解釈できるものといえる。

このような時空間メタファーとの関連を明示的に指摘しているのが、坂原茂（2012）である（さらに、坂原茂（1995）も参照）。関連する議論の箇所を以下に引用する（「継続相」、「始動相」は、それぞれ、本稿でいう「継続」、「変化」に相当する）。

- （16）「来る」の複合動詞が表す継続相は、(i) のように、過去のある時点から現在までの継続を表す。(ii) の事態が成り立てば、10 年後には太郎は言語学を 40 年間研究したことになるが、これは (ii) では表現できない。

(i) 太郎は 30 年間言語学を研究して来た。

(ii) * 太郎は、10 年後には、言語学を 40 年間研究して来る。

（中略）

一方、始動相を表す「来る」の複合動詞は、(iii) のように、容易に未来指示に使える。「来る」の移動において、移動対象が話し手でないなら、移動は過去のものでも未来のものでもよい。「来る」による始動相は時間移動メタファーによって成り立っているので、移動するのは話し手以外のものである。したがって、「来る」の表す始動相は、過去の事件でも未来の事件でも構わないことになる。

(iii) あと 2 時間すれば、空が明るくなって来る。

これに対して、継続相では、移動するのは知覚者（典型的には、話し手自身）である。「来る」によって表現できる話し手の移動は、(iv) のように過去の移動か、(v) のように、いったんここから離れて、またここに戻って来る未来の移動である（実際に表現されているのは、ここに戻って来る移動であり、ここから離れる移動は表現されていない）。

(iv) 私は、昨日もここに来た。

(v) 私は、パンを買って来る。

空間移動なら、いったん今いる場所を離れて、そこに戻って来ることもできる。しかし、時間については、一方向の移動しか許されない。いったん現在から未来に移動して、また現在に戻って来るというようなことはできない。したがって、空間移動では、行って戻って来る往復運動を「来る」と表現できるが、時間移動では、行ったきりになってしまい、「来る」とは言えないことになる。このように、始動相の基底にあるメタファーが他者の移動のメタファーであり、継続相の基底にあるのは話し手自身の移動のメタファーであると考えれば、なぜ始動相で未来指示ができ、継続相で未来指示ができないかが説明できる。

（坂原茂（2012: 59-60））（例文番号調整は筆者）

本稿では、上記の野村剛史（2009）、坂原茂（2012）を敷衍し、さらに、「ていく」との比較も含めた形で、「継続」と「変化」の「てくる」の時制制約と時間認識の問題について、さらに考察を深めてみたい。

4.2. 空間移動の「来る」の視点制約

先に見た坂原茂（2012）の（16）の記述からも部分的に看取されるように、「継続」と「変化」の「てくる」の時制制約は、空間移動の「来る」の視点制約（ないしは、直示制約）を受け継いだものとみなすことができる。すなわち、時間の経過を空間移動に喩えて捉える時空間マッピングに際して、源泉領域における空間移動の「来る」の視点制約が、目標領域におけるアスペクト標識「てくる」の時制制約となって受け継がれているのである。

ここでは、空間移動の「来る」を、(i) 話し手が移動主体となる「自己移動」の「来る」と、(ii) 話し手以外が移動主体となる「他者移動」の「来る」とに分け（坂原茂（2012）も参照）、それぞれの空間移動の「来る」に対して、次の視点制約を想定する³。

（17）空間移動の「来る」の視点制約

a. 「自己移動」の「来る」

基本的に、発話時に話し手がいる到達点への移動を表す。

b. 「他者移動」の「来る」

発話時または参照時（過去／未来のある時点）に話し手がいる到達点への移動を表す。

この視点制約によって、たとえば、以下の例の「来る」の適格性が説明される（以下の例文における「ここ」は、発話場所を指すものとする）。

（18）「自己移動」の「来る」

a. 僕はここまで一人で {来た／*行った}。 (発話場所への移動)

b. 僕は昨日あそこまで一人で {?来た／行った}。 (発話場所以外への移動)

c. 僕は明日あここまで一人で {*来る／行く}。 (発話場所以外への移動)

（19）「他者移動」の「来る」

a. 山田君はここまで一人で {来た／*行った}。 (発話場所への移動)

³ ここでの「来る」の整理は、本稿の議論に関わる用法のみを取り上げている都合上、やや単純化した整理となっている。空間移動の「来る」のより包括的な整理については、澤田淳（2016b, 2018）を参照されたい。

- b. 山田君は昨日あそこまで一人で {来た／行った}。 (発話場所以外への移動)
- c. 山田君は明日あそこまで一人で {来る／行く}。 (発話場所以外への移動)

「行く」は、「自己移動」、「他者移動」の別に関わらず、発話場所以外への移動であれば（すなわち、移動の到達点が発話場所でない限り）、用いられ得る。後で見るように、この空間移動の「行く」の分布は、「継続」と「変化」の「ていく」の時制制約の分布と平行的である。

以下の節では、「継続」、「変化」の「てくる」の時制制約が、それぞれ、「自己移動」、「他者移動」の「来る」の視点制約と平行性をなす点を見る。

4.3. 「継続」の「てくる」の時制性

はじめに、次の例を見てみよう。

- (20) a. 私は、(その日から) 今日まで バクテリアの研究を続け {てきた／*ていった}。
(発話時までの継続)
- b. 私は、(その年から) 5年前まで バクテリアの研究を続け {?てきた／ていった}。
(過去のある時点までの継続)
- c. 私は、(今日から) 5年後まで バクテリアの研究を続け {*てくる／ていく} つもりだ。
(未来のある時点までの継続)

「継続」の「てくる」は、a文のような発話時を到達点とする継続（＝発話時までの継続）は自然に表せるが、c文のような未来時を到達点とする継続（＝未来時までの継続）は表すことができない（この点については、坂原茂（2012）の（16）の記述内の例文（i）、（ii）も参照）。b文のような過去時を到達点とする継続（＝過去時までの継続）を表す例は、a文のような発話時を到達点とする継続（＝発話時までの継続）を表す例に比べると、やや許容度が下がる。逆に、「継続」の「ていく」は、b文やc文のような過去時や未来時を到達点とする継続（＝過去時や未来時までの継続）を表すことはできるが、発話時を到達点とする継続（＝発話時までの継続）を表すことができない。

以上の観察から、「継続」の「てくる」に対して、次の時制制約が想定される。

(21) 「継続」の「てくる」の時制制約

「継続」の「てくる」は、基本的に、発話時を到達点とする継続（＝発話時までの継続）を表す。

ここで注目すべきは、「継続」の「てくる」の時制制約（＝基本的に、発話時を到達点とする継続（＝発話時までの継続）を表す）は、話し手が移動主体となる「自己移動」の「来る」の視点制約（＝基本的に、発話時に話し手がいる到達点への移動を表す）と平行性をなすという点である。このことから、「継続」の「てくる」は、空間移動のうち、「自己移動」の「来る」を基盤に発達した用法であり、そこには、「自己移動」の時空間メタファーが反映されているといえる（坂原茂（2012）も参照）。

「継続」の「てくる」は、基本的に「発話時までの継続」を示すが、先に見た（20）のb文とc文が示すように、「過去のある時点までの継続」は、「未来のある時点までの継続」に比べると、相対的に「てくる」の許容度が高い。とりわけ、継続の到達時点が「それまで／その年まで」のような非直示的な時間表現で示された場合（「（今から）5年前まで」のような直示的な時間表現と比較のこと）、「過去のある時点までの継続」としての「てくる」は、さらに自然さを増すように感じられる。次は実例である。

- (22) 大学生で初めてエチオピアを訪れたとき、それまでたくさん勉強してきたつもりだった。でも、現地では、自分がいかに無知かを繰り返し思い知らされた。

[過去のある時点までの継続]

(『朝日新聞』2018年2月27日、朝刊)

継続の到達時点が非直示的時間表現（例：「それまで」）で表された場合、発話時の視点から解放され、過去の体験時に視点を没入させた描写がしやすくなるのだと考えられる。

「自己移動」の「来る」でも、過去の体験時に視点を没入させることで、発話場所の視点から解放されやすくなる点が認められ、(22)の「継続」の「てくる」の現象との相似性が観察される。

- (23) (状況：話し手は発話時において到達点の東京にはいない)

私が東京に {行って／(?) 来て} まずはじめにしたことは、アパート探しでした。

(cf. 私が東京に {行って／* 来て} まずはじめにすることは、アパート探しです。)

(澤田淳 (2016b: 189))

一方、「未来時までの継続」を示す場合、「継続」の「てくる」の使用は厳しく排除される。以下の例が示すように、未来の到達時点が、直示的時間表現（例：「来年まで」）であっても、非直示的時間表現（例：「その年まで」）であっても、「未来時までの継続」を「てくる」で表すことはできない。

- (24) *私は {来年まで／その年まで} バクテリアの研究を続けてくるつもりだ。

(未来時までの継続)

- (cf. 私は {来年まで／その年まで} バクテリアの研究を続けていくつもりだ。)

次の例では、ル形「てくる」で表されているが、ここでの「てくる」は、「未来時までの継続」ではなく、「現在時までの継続」を表している。

- (25) ただ、長年暮らしてくるとお互い見飽きるのは仕方がない。夫婦間でも日々の演出が必要です。

(現在時までの継続) (『讀賣新聞』2002年11月20日、朝刊)

ちなみに、韓国語の直示移動動詞「오다 (ota)」「(来る)」は、複合動詞の後項「아/어 오다 (a/e ota)」「(～くる)」へと文法化する中で、継続アスペクトの用法を発達させているが(塚本秀樹(2012)、徐珉廷(2013)など)、以下の例が示すように、韓国語の「継続」の「아/어 오다 (a/e ota)」においても、日本語の「継続」の「てくる」と全く同様の時制制約が課される。

- (26) 나는 오늘까지 박테리아 연구를
na-nun onul-kkaci paktheylia yenkwu-lul
私 - は 今日 - まで バクテリア 研究 - を
계속 해 왔다.
keyesok hay wassta.
継続 して 来た
「私は今日までバクテリアの研究を続けてきた」

(現在時までの継続)

- (27) a. ? 나는 5년전까지 박테리아 연구를
na-nun 5nyencen-kkaci paktheylia yenkwu-lul
私 - は 5年前 - まで バクテリア 研究 - を
계속 해 왔었다.
keyesok hay wassessta.
継続 して 来た
「私は5年前までバクテリアの研究を続けてきた」

(過去のある時点までの継続)

- b. 나는 그해까지 박테리아 연구를
 na-nun kuhay-kkaci paktheylia yenkwu-lul
 私 - は その年 - まで バクテリア 研究 - を
 계속 해 왔었다.
 kyeyso^k hay wassessta.
 継続 して 来た

「私はその年までバクテリアの研究を続けてきた」

(過去のある時点までの継続)

- (28)* 나는 5년후까지 박테리아 연구를
 na-nun 5nyenhwu-kkaci paktheylia yenkwu-lul
 私は 5年後 - まで バクテリア 研究 - を
 계속 해 올 것이다.
 kyeyso^k hay ol kesita.
 継続 して 来る つもりだ

「私は、5年後までバクテリアの研究を続けてくるつもりだ」

(未来のある時点までの継続)

以上の議論をまとめると、次のようになる。

- (29) 「継続」の「てくる」の時制制約 (= 基本的に、発話時を到達点とする継続を表す) は、「自己移動」の「来る」の視点制約 (= 基本的に、発話時に話し手がいる到達点への移動を表す) と平行的である。「継続」の「てくる」は、空間移動のうち、「自己移動」の「来る」を源泉領域にして発達した用法であり、「自己移動」(moving ego) の時空間メタファーを反映する。

ここで、「継続」の「てくる」の主語指示物について考えてみよう。以下の例では、「継続」の「てくる」の主語指示物は話し手(自己)であり、「自己移動」の「来る」との繋がり、及び、「自己移動」の時空間メタファーの反映が明確である。

- (30) 生物学者はもともと、小さいのちが好きで科学を志したから、つい細部に目が行き、些事にこだわり、それを深く追求する傾向にある。けれども、ほんとうは、もっと大きな問題に答えたかったはずなのだ。とりもおさず、生命とは何か、という問いである。私は分子生物学を研究しつつ、絶えずそのことを忘れないようにしてきた。

[継続] (『朝日新聞』2017年8月10日、朝刊)

主語指示物が話し手（自己）である場合、次のように、「てくる」を「てまいる」に謙譲語化した例も見られる。

- (31) 幼い頃より結婚をするときは皇族の立場を離れるときであるという意識を持って過ごしてきました。その中で天皇陛下をお助けし、自分なりにできる限り皇族としての仕事を大切に果たそうと努めるとともに、私自身の生活を大事にして参りました。
[継続]（『朝日新聞』2017年9月4日、朝刊）

一方で、「継続」の「てくる」の主語指示物に、話し手（自己）以外のものが生起している例も見られる。

- (32) 人類の歴史は数百万年にすぎないが、シーラカンスは4億年。競合相手の少ない深い海で、じっと静かに生息してきた。
[継続]（「天声人語」『朝日新聞』2023年3月21日、朝刊）
- (33) スポーツの歴史は社会や産業の変化を映してきた。走る、泳ぐ、組み伏せるといったシンプルなものから、球技や馬術、自動車レースなどへと幅を広げてきた。そう考えれば必然かもしれない。「e（エレクトロニック）スポーツ」の五輪採用について国際オリンピック委員会が検討を始めた。
[継続]（「天声人語」『朝日新聞』2017年11月5日、朝刊）

主語指示物が話し手（自己）以外のものである場合、次のように、「てくる」を「てこられる」などのように尊敬語化した例も見られる。

- (34) 25日に結婚のあいさつを受けた上皇ご夫妻は、初孫の眞子さまを小さい頃から、慈しみを持って見守ってこられた。
[継続]（『讀賣新聞』2021年10月26日、朝刊）

このような主語指示物に話し手（自己）以外のものが生起している例は、「継続」の「てくる」が「自己移動」の「来る」を基盤に発達した用法であり、「自己移動」の時空間メタファーを反映する用法であるとする本稿の主張に対して、一見、問題となる例のように見えるが、そうではない。

実は、「自己移動」の「来る」には、主語指示物が話し手（自己）以外のものである次のような例も含まれる（「ここ」は、発話場所を指すものとする）。

(35) 「自己移動」の「来る」

- a. 山田君はここまで私と一緒に {来た／*行った}。 (発話場所への移動)
- b. 山田君は昨日あそこまで私と一緒に {?来た／行った}。
(発話場所以外への移動)
- c. 山田君は明日あそこまで私と一緒に {*来る／行く}。
(発話場所以外への移動)

ここでの主語指示物は「山田君」であるが、話し手も移動主体となっていることから、ここでの「来る」は「自己移動」を表すと解釈される。実際、ここでの「来る」の分布は、4.2節で見た(18)の「自己移動」の「来る」の分布と平行的である。

それゆえ、「自己移動」の「来る」を基盤に発達した「継続」の「てくる」において、(32) - (34)のように、話し手（自己）以外のものが主語指示物として生起している例があっても何ら不思議ではない。

(32) - (34) の例のように、主語指示物が話し手（自己）以外のものである場合、話し手（自己）は、他者の来歴（歩み）を（過去→現在へと）追跡的に辿る視線から出来事の時間的経過を捉えていると解釈される。このように解釈するならば、事象の主語指示物に話し手（自己）以外のものが生起している「継続」の「てくる」の例に対しても「自己移動」のメタファーの反映を想定することは自然である。

4.4. 「変化」の「てくる」の時制性

「変化」の「てくる」は、発話時における変化のみならず、過去時や未来時における変化も自然に表すことができる。

- (36) a. おい、川の水嵩が増え {てきた／*ていった} ぞ。早く非難しよう。
(発話時における変化)
- b. 昨日、夕方頃から川の水嵩が急激に増え {てきた／ていった}。
(過去時における変化)
- c. 夕方頃から川の水嵩が増え {てくる／ていく} はずだ。
(未来時における変化)

次の例も参照されたい。

- (37) a. 敵の勢いが弱まっ {てきた／*ていった} 今が総攻撃のチャンスだ。
(発話時における変化)
- b. 敵の勢いが弱まっ {てきた／ていった} あの時が総攻撃のチャンスだった。
(過去時における変化)
(澤田淳 (2008: 65-66))

神尾昭雄 (2002) は、「変化」の「てくる」と「ていく」の違いについて、次の興味深い観察をおこなっている。

- (38) a. 食料が段々なくなって来た。
b. 食料が段々なくなって行った。
(神尾昭雄 (2002: 91))

神尾昭雄 (2002: 91-92) によれば、a 文は、「食料がなくなりつつある」という情報を、たとえば城に立て籠もっている兵隊の食料管理者が言っているように感じられるのに対して、b 文は、その戦いと籠城の経緯を後世の歴史家が客観的に述べているように感じられるという。そして、この観察を「なわ張り理論」から解釈すると、a 文では、情報を話し手のなわ張りに入っているものとして捉えており、b 文では情報を話し手のなわ張りの外にあるものとして捉えているということになるという。

私見では、上の両文の解釈の違いには、神尾昭雄 (2002) が述べるような話し手のなわ張り内での情報か否かといった「なわ張り」の相違に加えて、タ形「ていった」が、タ形「てきた」と異なり、現在時の変化の描写はできず、専ら過去時の変化の描写に使用が限定されるという「時制性」の相違も関係しているといえる (澤田淳 (2008))。すなわち、「食料がなくなりつつある」という情報を、たとえば城に立て籠もっている兵隊の食料管理者が言っているように感じられる」(神尾昭雄 (2002: 91-92)) という a 文が含むニュアンスは、現在時の変化を描写できるタ形「てきた」の時制性と連動しており、一方、「その戦いと籠城の経緯を後世の歴史家が客観的に述べているように感じられる」という b 文が含むニュアンスは、専ら過去時の変化を描写するタ形「ていった」の時制性と連動しているのである。

以上の議論から、「変化」の「てくる」に対して、次の時制制約が想定される。

- (39) 「変化」の「てくる」の時制制約：

「変化」の「てくる」は、発話時または参照時 (過去／未来のある時点) を到達時点とする変化を表す。

ここで注目すべきは、「変化」の「てくる」の時制制約（＝発話時または参照時（過去／未来のある時点）を到達時点とする変化を表す）は、話し手以外が移動主体となる「他者移動」の「来る」の視点制約（＝発話時または参照時（過去／未来のある時点）に話し手がいる到達点への移動を表す）と平行性をなすという点である。このことから、「変化」の「てくる」は、空間移動のうち、「他者移動」の「来る」を基盤に発達した用法であり、そこには、「時間移動」の時空間メタファーが反映されているといえる（坂原茂（2012）も参照）。

野村剛史（2009: 48）は、「柿の実が赤くなってきた」だと空間的距離の接近が無いわけだから、主体の移動は現象の現出として（中略）、ただ時間的にのみ「今」に近づいた感じがする」点を指摘している（（15）参照）。この野村剛史（2009）の指摘は、「変化」の「てくる」が「時間移動」の時空間メタファーを反映している点を捉えたものと解釈される。たとえば、「柿の実が赤くなってきた」は、次のように図示できよう（ここでは、時の流れが「過去 ← 現在 ← 未来」であり、現在是不動である点に注目されたい）。



図3：「柿の実が赤くなってきた」の時間認識（時間移動のメタファー）

ここでは、柿の実が赤みを帯びた段階に入ったと認識した時点（ t_2 ）（＝現在時）での発話が「柿の実が赤くなってきた」という発話になる⁴。

なお、次の例が示すように、「柿の実が赤くなってきた」では、柿の実の色づきは完結しておらず、柿の実がこれからさらに赤みを増すことが含意される（坂原茂（2012）も参照）。

⁴ 注意すべきは、「柿の実が赤くなってきた」は、次のような「自己移動」のメタファーの反映としては分析できないという点である。

(40) 庭の柿の実、だいぶ赤くなってきたね。これからもっと赤くなるよ。(変化の途上)

(41) ?? 柿の実が完全に赤くなってきた。(変化の完結)

以上の議論をまとめると、次のようになる。

(42) 「変化」の「てくる」の時制制約（＝発話時または参照時（過去／未来のある時点）を到達時点とする変化を表す）は、話し手以外が移動主体となる「他者移動」の「来る」の視点制約（＝発話時または参照時（過去／未来のある時点）に話し手がいる到達点への移動を表す）と平行的である。「変化」の「てくる」は、空間移動のうち、「他者移動」の「来る」を源泉領域にして発達した用法であり、「時間移動」(moving time) の時空間メタファーを反映する。

ここで、「変化」の「てくる」と、「時間移動」のメタファーの典型例としてよく取り上げられる次のような「てくる」の例との違いについて考えてみよう。

- (43) a. クリスマスがやってきた。
b. クリスマスが近づいてきた。

これらの「てくる」においては、「移動」の意味合いが色濃く認められる。「やっってくる」は、本動詞「来る」とほぼ同じであり、また、「近づいてくる」の「てくる」は、「移動の方向づけ」(3.1 節参照) の用法である。すなわち、これらの例では、クリスマスが時間軸上を移動して



図 i 「柿の実が赤くなってきた」の時間認識（自己移動のメタファー）

ここでは、話し手（自己）が、「過去→現在→未来」の時の流れに沿って、次第に赤さを帯びる柿の実の変化の様子を捉えている点が表示されている。しかしながら、「変化」の「てくる」に対して、このような「自己移動」のメタファーを適用することはできない。なぜなら、「変化」の「てくる」は、空間移動の「来る」のうち、「他者移動」の「来る」を基盤としており、話し手（自己）は、事象の変化と共に移動する主体ではなく、事象の変化を出迎える主体であるからである。

来る点で、まさしく事象の「到来・接近」を表しており、「時間移動」のメタファーが明瞭に読み取れる。

それに対して、「変化」の「てくる」は、アスペクト標識となっていることから、「来る」の意味が抽象化しており、「移動」の意味合いはかなりの程度希薄化しているといえる。

- (44) a. 柿の実が赤くなってきた。(変化)
b. イチョウの葉が色づいてきた。(変化)

「変化」の「てくる」が、事象の「到来・接近」としてよりも、事象の「出来・出現」として感じられやすいのはこのためであるといえる⁵。

4.5. 「変化」の「てくる」と「ていく」の時間認識の相違

野村剛史(2009: 50)では、「変化」の「てくる」とともに、「変化」の「ていく」も、「過去 ← 現在 ← 未来」の時の流れを示す(すなわち、「時間移動」のメタファーを反映する)表現とみなされている。しかし、以下の例からも看取されるように、「変化」の「ていく」は、(ル形「テイク」、タ形「テイッタ」の別に関わらず)明らかに未来志向の方向性(ないしは、未来を見通すような眺望的視点)が認められる。それゆえ、「変化」の「ていく」では、「過去 → 現在 → 未来」の時の流れを示す「自己移動」のメタファーが反映されているとみたほうがよいといえる。

- (45) 同气象台によると、今後、一時的に寒気が入り冷え込むことはあるが、徐々に暖かくなっていくという。 [変化] (『朝日新聞』2009年02月14日、朝刊)
(46) 袴田さんは「月面の開発が進めば、資源探査の必要性はさらに高まっていくだろう」と話す。 [変化] (『朝日新聞』2017年11月5日、朝刊)
(47) 車ですれ違った際、熱心に手を振ってくれる人が日を追うごとに増えていった。 [変化] (『讀賣新聞』2024年4月29日、朝刊)

このように捉えるならば、「継続」の「ていく」と「変化」の「ていく」は、ともに、「過去 → 現在 → 未来」の時の流れを示す「自己移動」のメタファーを反映した表現ということになる。実際、「継続」の「ていく」(例:これからたくさん本を書いていく。)と「変化」の「て

⁵ この点で、「変化」の「てくる」は、「出現」の「てくる」(3.1節参照)と近接した用法といえる。たとえば、「空が明るくなってきた」は、「変化」とも「出現」とも捉え得る。

いく」(例：これから寒くなっていく)は、前項動詞が動作動詞か変化動詞かの違い以外、両者の「ていく」の時間認識の間に本質的な違いはないといえる。「継続」の「ていく」と「変化」の「ていく」は、時制制約の面でも共通した振る舞いを示す点にも注目されたい((20)の「継続」の「ていく」と(36)の「変化」の「ていく」の並行的な分布を参照のこと)。

以上の議論を踏まえて、以下の「変化」の「ていく」と「てくる」の違いについて考えてみよう。

(48) a. これから柿の実が赤くなっていくだろう。

b. これから柿の実が赤くなってくるだろう。

(49) a. これから寒くなっていくだろう。

b. これから寒くなってくるだろう。

a 文と b 文は、いずれも、これから生じる変化を述べている文であり、客観的には同一の事柄を表している。しかしながら、「変化」の「ていく」が用いられた a 文は、「現在 → 未来」の時の流れを示す「自己移動」のメタファーを反映した文であるのに対して、「変化」の「てくる」が用いられた b 文は、「現在 ← 未来」の時の流れを示す「時間移動」のメタファーを反映した文であるといえる。

たとえば、(48)の a 文と b 文の違いは、それぞれ、次のように図示される(図 4 と図 5 では、時の流れを示す矢印の向きが逆となっている点に注目されたい)。



図 4: 「これから柿の実が赤くなっていくだろう」(自己移動のメタファー)



図 5: 「これから柿の実が赤くなってくるだろう」(時間移動のメタファー)

次の例では、「現在 → 未来」の時の流れを示す「自己移動」のメタファーを反映した「ていく」と、「現在 ← 未来」の時の流れを示す「時間移動」のメタファーを反映した「てくる」が、一文内の異なる節内に現れている。

- (50) 「今回の改元はちょうど出入国管理法の改正と重まりました。これまで以上に日本には外国人が増えていくでしょうし、これまでの日本の文脈を前提にできないようになってくる。(略)」 [変化] (『朝日新聞』2019年4月26日、朝刊)

最後に、次の例の違いを考えてみよう。

- (51) a. これから日本はどうなっていくのだろうか。
(現在 → 未来：自己移動のメタファー)
b. ?これから日本はどうなってくるのだろうか。
(現在 ← 未来：時間移動のメタファー)

この例では、「ていく」と異なり、「てくる」はやや不自然に感じられる。結果が見通しにくい先行きの不透明な事象は、出迎える立場からは捉えにくいのであろう。

4.6. 「出現」の「てくる」と「消滅」の「ていく」の時間認識

最後に、「出現」の「てくる」と「消滅」の「ていく」にも触れておこう。

以下の例で示されるような「出現」の「てくる」では、「時間移動」のメタファー（現在 ← 未来）が反映されていると解釈される。

- (52) これから生まれてくる子どもたち、次世代の人たちがその時代にあった五輪を提言できるなら、招致を一から始めればいいのだと思います。

[出現] (『朝日新聞』2023年12月02日、朝刊)

- (53) ここで興味深いのは、音楽を、作曲家によるメッセージ伝達のメディアとしてではなく、生命や環境を維持するための、ひとつのツールとして捉えている点だ。これは、悪くない、と思う。そんな音楽「社会」が、これから現れてくるとすれば、ほくたちが教えなくてはならないことも変化していくはずだ。

[出現] (『讀賣新聞』1998年03月10日、夕刊)

次に、以下の例で示されるような「消滅」の「ていく」でも、「時間移動」のメタファー（過去 ← 現在）が反映されていると解釈される⁶。

(54) 戦争体験者は日々少なくなり、悲惨な戦争の記憶は風化していく。その結果、敗戦という猛省の中でうたいあげた平和へ熱い思いも、記憶の片隅へと、過去へと消えていく。
[消滅]（『朝日新聞』2005年05月20日、朝刊）

(55) 元号が改まったいま、事件はさらに過去へと遠のいていく。
[消滅]（『朝日新聞』2019年05月04日、朝刊）

(56) マイカーの普及もあり、72年に廃止となる。バスへと切り替わったが、木造の駅舎は昔のままだ。旧事務所部分は「ふれ茶内館」となり、町営軌道の資料を展示している。「先人の苦労をしのんでほしい」と青田さん。消えていったものへの「挽歌」が聞こえてくる。
[消滅]（『朝日新聞』2017年09月28日、夕刊）

この点で、これらの「消滅」の「ていく」は、以下の例のような事象の過去への移動・沈下（過去 ← 現在）を示す表現と相似した時間認識を示すといえる。

(57) 展覧会タイトルに選んだ「汽車」と「かたな」は、いずれも日本の近代化の象徴だ。汽車が新時代の幕開けを告げれば、刀は武士とともに過去へと流れ去った。
（『朝日新聞』2015年07月28日、朝刊）

(58) 原爆は、日に日に過去へと遠ざかって、伝えることが難しくなっています。それでもチェルノブイリの事故以来、原爆への見方は変わったと思う。
（『朝日新聞』1996年07月26日、朝刊）

(59) 戦争が終わって六十回目の夏。戦いの記憶は年々薄れ、いつしか別世界の出来事のように、遠い過去へと沈みつつある。
（『中日新聞』2005年08月02日、朝刊）

以上のように、「出現」の「てくる」は「現在 ← 未来」の時の流れ、「消滅」の「ていく」は「過去 ← 現在」の時の流れを表しており、いずれも、「時間移動」のメタファーが関与している。

「継続」「変化」「出現」「消滅」の「ていく」「てくる」に反映される時空間メタファーを

⁶ 野村剛史（2009: 50）では、「変化」と「消滅」の「ていく」は、ともに、「過去←現在」の時の流れを示す（すなわち、「時間移動」のメタファーを反映する）表現と想定されている。一方、本稿では、「変化」（及び「継続」）の「ていく」は、「現在→未来」の時の流れを示す「自己移動」のメタファー、「消滅」の「ていく」は、「過去←現在」の時の流れを示す「時間移動」のメタファーを反映しているものとみなす（この点については、4.5節の議論も参照）。

下の表にまとめておこう。

表：「継続」「変化」「出現」「消滅」の「ていく」「てくる」に反映される時空間メタファー

用法	形式	反映される時空間メタファーの種類
継続	「ていく」	自己移動のメタファー
	「てくる」	自己移動のメタファー
変化	「ていく」	自己移動のメタファー
	「てくる」	時間移動のメタファー
出現	「てくる」	時間移動のメタファー
消滅	「ていく」	時間移動のメタファー

5. おわりに

本稿では、「継続」と「変化」のアスペクト標識「てくる」（「ていく」）が表す時間認識について、時空間メタファーの観点から考察をおこない、主に以下の点を明らかにした。

1. 「継続」の「てくる」の時制制約（＝基本的に、発話時を到達点とする継続を表す）は、「自己移動」の「来る」の視点制約（＝基本的に、発話時に話し手がいる到達点への移動を表す）と平行的である。「継続」の「てくる」は、空間移動のうち、「自己移動」の「来る」を源泉領域にして発達した用法であり、「自己移動」（moving ego）の時空間メタファーを反映する。
2. 「継続」の「てくる」が「自己移動」の時空間メタファーを反映するとした場合、主語指示物に話し手（自己）以外のものが生起している例が一見問題となる。しかし、主語指示物が話し手（自己）以外である例でも、話し手（自己）は、他者の来歴（歩み）を（過去→現在へと）追跡的に辿る視線から出来事の時間的経過を捉えているとみることができる。すなわち、主語指示物が話し手（自己）以外である「継続」の「てくる」の例においても、「自己移動」のメタファーの反映を読み取ることができる。
3. 「変化」の「てくる」の時制制約（＝発話時または参照時（過去／未来のある時点）を到達時点とする変化を表す）は、話し手以外が移動主体となる「他者移動」の「来る」の視点制約（＝発話時または参照時（過去／未来のある時点）に話し手がいる到達点への移動を表す）と平行的である。「変化」の「てくる」は、空間移動のうち、「他者移動」の「来る」を源泉領域にして発達した用法であり、「時間移動」（moving time）の時空間メタファーを反映する。
4. 「時間移動」のメタファーの典型例としてよく取り上げられる「クリスマスがやってき

た」や「クリスマスが近づいてきた」の例では、「てくる」が事象の「到来・接近」を表す点で、「移動」の意味が保持されており、「時間移動」のメタファーが明瞭に読み取れる。それに対して、「変化」の「てくる」は、アスペクト標識となっていることから、「移動」の意味はかなりの程度希薄化している。それゆえ、「変化」の「てくる」は、実際には、事象の「到来・接近」としてよりも、事象の「出来・出現」として感じられやすい。

5. 「継続」の「ていく」（例：これからたくさん本を書いていく）と「変化」の「ていく」（例：これから寒くなっていく）は、前項動詞が動作動詞か変化動詞かの違い以外、本質的な違いはなく、時制制約の面でも共通した振る舞いを示す。「継続」の「ていく」と「変化」の「ていく」は、未来志向の眺望的視点が認められる点で、ともに「自己移動」のメタファーを反映している。
6. これから生じる変化を述べる場合、「変化」の「ていく」（例：これから寒くなっていくだろう）でも、「変化」の「てくる」（例：これから寒くなってくるだろう）でも表せるが、「変化」の「ていく」は、「現在 → 未来」の時の流れを示す「自己移動」のメタファーを反映するのに対して、「変化」の「てくる」は、「現在 ← 未来」の時の流れを示す「時間移動」のメタファーを反映する。両者は、客観的には同一の事柄を表すものの、事柄に対する時間認識の仕方が異なっている。

直示移動動詞 COME/GO は、様々な言語においてテンス・アスペクト形式への文法化が認められる。それらの COME/GO 由来のテンス・アスペクト形式は、主に、「自己移動」と「時間移動」の時空間メタファーとの対応関係を探る中で考察が進められてきている。本稿もこのような研究の潮流の中に位置づけられるが、本稿では、「来る」（「行く」）の視点制約（直示制約）との対応関係から、「てくる」（「ていく」）のアスペクト用法の時間認識を考察した点に特徴がある。COME/GO のテンス・アスペクト形式と時空間メタファーとの対応づけをより明示的な形で示す上では文法的な観点からの裏づけが重要となるが、従来の COME/GO 由来のテンス・アスペクト形式の研究においては、このような文法的観点からの分析をおこなった研究は少なかったように思われる。この意味で、本稿の分析手法は、他言語における COME/GO 由来のテンス・アスペクト標識の分析に対しても、有益な知見を提供することができるものと考ええる。

引用例出典

渡部泰明『和歌とは何か』岩波書店、2009年

参考文献

- Botne, Robert (2006) Motion, time, and tense: On the grammaticization of *COME* and *GO* to future markers in Bantu. *Studies in African Linguistics* 35 (2) : 127-188.
- Bybee, John, Revere Perkins and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Clark, Herbert (1973) Space, time, semantics, and the child. In: Timothy E. Moore (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. 27-63. New York: Academic Press.
- Emanation, Michele (1991) Point of view and prospective aspect. In: Laurel A. Sutton, Christopher Johnson and Rutj Shields (eds.) *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 484-495.
- Emanation, Michele (1992) Chagga 'come' and 'go': Metaphor and the development of tense-aspect. *Studies in Language* 16 (1) : 1-33.
- Essegbey, James (2004) Auxiliaries in serialising languages: On COME and GO verbs in Sranan and Ewe. *Lingua* 114 (4) : 473-494.
- Fillmore, Charles. J. (1997) *Lectures on Deixis*. California: CSLI Publication. (Fillmore, Charles. J. (著)・澤田淳 (訳) (2022) 『ダイクシス講義』東京: 開拓社.)
- Fleischman, Suzanne (1982) The past and the future: Are they coming or going? In: Monica Macaulay, Orin Gensler, Claudia Brugman, Inese Civkulis, Amy Dahlstrom, Katherine Krile and Rob Sturm (eds.) *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 322-334.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』東京: 大修館書店.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』東京: ひつじ書房.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*. Third edition. Harlow: Pearson Longman.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法3』東京: くろしお出版.
- 野村剛史 (2009) 「ツとヌ再訪 — テクル・テイクと対照しながら —」『國語と國文学』86 (11) (11月特集号): 41-51.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*. London: Macmillan.
- 坂原茂 (1995) 「複合動詞「Vて来る」」『言語・情報・テキスト』2: 109-143. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.
- 坂原茂 (2012) 「アスペクト表示の複合動詞「Vて来る」と空間時間メタファ」『國語と國文学』89 (11) (11月号): 53-62.
- 澤田淳 (2008) 「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性 — タ形「テキタ」と「テイッタ」の非対称的な分布に注目して —」『日本語の研究』4 (4) : 63-69.
- 澤田淳 (2009) 「移動動詞「来る」の文法化と方向づけ機能 — 「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ —」『語用論研究』11: 1-20.
- 澤田淳 (2016a) 「「行為の方向づけ」の「てくる」の対照言語学的・歴史的研究 — 移動動詞から受影マーカへ —」

- 小野正樹・李奇楠（編）『言語の主観性 — 認知とボライトネスの接点 —』87-110. 東京：くろしお出版.
- 澤田淳（2016b）「日本語の直示移動動詞「行く／来る」の歴史 — 歴史語用論的・類型論的アプローチ —」
山梨正明他（編）『認知言語学論考 No. 13』185-259. 東京：ひつじ書房.
- 澤田淳（2018）「日本語の直示移動動詞の選択原理について — 「行く／来る」の選択はどのようにして決まるのか？ —」『言語文化研究 久保進教授記念号』38（1-2）：237-290. 松山大学総合研究所.
- 澤田淳（2025）「ダイクシスからみた時空間メタファー」山梨正明（編）『認知言語学論考 No.18』27-63.
東京：ひつじ書房.
- 徐珉廷（2013）『〈事態把握〉における日韓話者の認知スタンス — 認知言語学の立場から見た補助動詞的な用法の「ていく／くる」と「e kata/ota」の主観性 —』東京：ココ出版.
- Swan, Michael (2016) *Practical English Usage*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- Takahashi, Kiyoko (2018) Deictic motion constructions in Japanese and Thai. In: Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*. 291-312. Berlin: De Gruyter Mouton.
- 塚本秀樹（2012）『形態論と統語論の相互作用 — 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究 —』東京：ひつじ書房.
- 渡邊淳也（2017）「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化」天野みどり・早瀬尚子（編）『構文の意味と拡がり』223-245. 東京：くろしお出版.

付記：

本稿は、日本言語学会第136回大会（2008年6月22日、於：学習院大学）、日本中部言語学会第63回定例研究会（2017年12月16日、於：静岡県立大学）、175回NINJALサロン（2018年7月31日、於：国立国語研究所）での発表内容に加筆修正を施したものである。それぞれの会において貴重なコメントをくださった方々に深く御礼申し上げる次第である。本研究は、JSPS 科研費 JP21K00508 の助成を受けたものである。